

Aichi University

Lingua



INSTITUTE FOR LANGUAGE EDUCATION, AICHI UNIVERSITY

No. 27 July 2026



ハワイの海を想像しながら、韓国チョンドンジン海水浴場
『『シンソンから、』、私の視線から』より

CONTENTS

〈特集〉 心に残る1冊——学生時代に読みたい本 その2

- ・ 韓国 『シンソンから、』、私の視線から 経営学部2年 YOON JIWOO 2~3
- ・ 中国 今なお心に生きる英雄たち 現代中国学部3年 キョウ ゲンチョウ 4
- ・ アメリカ 心に残る一冊
——古今をつなぐ人間の魂の架け橋 現代中国学部4年 鄧 卓 5
- ・ イギリス 『ジェーン・エア』が私に教えてくれたこと 経済学部
ローレン・ランズベリー 6~7
- ・ フランス 見えない距離を生きる
——『ぼくのともしぢ』が映す人間関係 経営学部3年 武市 梨愛 8
- ・ フランス フランスの小説を読んでみませんか 経営学部 下村 武 9~10
- ・ 日本 自分を肯定する、ということ 国際コミュニケーション学部4年 小林 遥香 11
- ・ 日本 偶然か、必然か 法科大学院 松井 直之 12~13

〈名古屋キャンパス〉 2025年度外国語コンテスト結果 14

〈豊橋キャンパス〉 LANGUAGE CAFÉ 15

2026年度外国語検定試験奨励金制度のご案内／編集後記 16

心に残る1冊

学生時代に読みたい本 その2

『シソンから、』、私の視線から

書籍名：シソンから、 著作者：チョン・セラン

経営学部2年
YOON JIWOO

『シソンから、』は、一人の女性の人生と、彼女を取り巻く家族たちの視線を通して物語が展開される小説です。この作品は特に女性読者に対して、新しい生き方や人生の捉え方を提示してくれる点で、読んでみる価値のある作品だと思います。また、「シソン」という名前は韓国語で「視線」と似た発音をしており、本作が一人の人生だけでなく、それを取り巻く多様な視線によって語られる物語であることを象徴しています。

シム・シソンは、戦争によって家族を失う経験を経てハワイへ渡り、新しい人生を切り開きました。結婚や別れ、さまざまな出会いと出来



遠い海を眺めながら

事を経験しながらも、彼女は状況に流されることなく、自らの選択によって生きていきました。その姿は、女性が独立した存在として生きることが容易ではなかった時代において、強く印象に残るものでした。また本作では、韓国戦争だけでなく、韓国社会における女性としての生きづらさや制約といった側面も描かれており、時代や社会の中で女性がどのような困難に直面してきたのかについても考えさせられました。さらに、彼女の生き方は娘たちにも影響を与え、価値観が世代を越えて受け継がれていく様子も丁寧に描かれていました。

そのうえ、家族たちがシソンの人生をそれぞれの記憶から振り返りながら物語が進んでいく構成が取られている点も印象的でした。単にシソンの過去が語られるだけでなく、彼女と過ごした時間やその意志を通して、残された家族たちがどのように学び、困難を乗り越えていくのかという姿も描かれていました。そのため、本作は一人の女性の生き方を描く物語であると同



『シソンから、』の表紙

時に、周囲の人々の人生にも焦点を当てた作品であると感じられました。こうした複数の視点から描かれることで、人生における困難や向き合い方についても多角的に考えられるのです。また、韓国戦争による家族の離別やその記憶が個人に与える影響も描かれており、それが家族関係や価値観の形成にどのように関わっていくのかが丁寧に表現されていました。

こうした歴史的背景と個人の人生が結びついて描かれる点は、本作の大きな魅力だと思います

す。私がこの本を学生時代に読みたいと考える理由は、これから社会に出ていく中で直面するかもしれない現実について考えるきっかけになるからです。特に、女性として社会の中で感じる困難や葛藤が描かれている点は、将来の自分と重ね合わせながら読むことができる部分であると思います。そして、もし実際に似たような状況に直面したときには、シソンやその家族たちの生き方を思い出し、自分の意志を持って乗り越えていく力になるのではないのでしょうか。

今なお心に生きる英雄たち

書籍名：三国志演義 著作者：羅貫中

現代中国学部3年
キョウ ゲンチョウ

『三国志演義』は中国四大古典小説の一つで、羅貫中によって書かれた歴史長編小説です。東漢末期から三国時代の動乱を背景に、魏・蜀・呉の三国が天下をめぐる争う壮大な物語が描かれています。多くの英雄たちの知略や義、そして人間らしい弱さまでが描かれ、非常に魅力的な作品です。



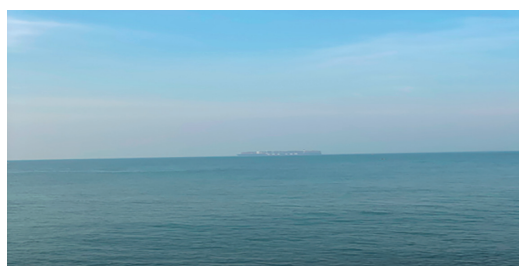
自分が持っている『三国志演義』という本です

最も印象に残った人物は、やはり諸葛亮（孔明）です。彼は知略に優れ、冷静な判断力と深い思慮を持ち合わせた軍師です。「草船借箭」「空城の計」「七たび孟獲を捕らえて七たび放つ」など、数々の奇策を用いて敵を翻弄し、蜀の国を支え続けました。また、「鞠躬尽瘁、死而后已（身を尽くして力を尽くし、死して後やむ）」という言葉の通り、彼は蜀に忠誠を誓い、死ぬまで全力で国を支え続けた姿勢には深く感動しました。現代においても、諸葛亮のような責任感と誠実さを持つ人物は尊敬されるべきだと思います。

劉備の姿勢も忘れられません。彼は仁義を重んじる君主であり、部下や民を思いやる心に溢れていました。「三顧の礼」で諸葛亮を迎えたエピソードからも、彼の人徳が伺えます。しかし、理想だけでは国を治めるのは難しく、義弟・関羽の仇を討とうとして夷陵の戦いで大敗したことは、感情に流された結果の失敗でした。この出来事から、指導者には「情」と「理」のバランスが必要だと学びました。

一方、曹操は非常に現実主義的な人物として描かれています。彼は「乱世の奸雄」とも呼ばれ、時には冷酷な判断を下すこともあります。政治家・軍人としては非常に有能でしたが、「寧我負人、毋人負我（人を裏切るとも、人に裏切られるなかれ）」という言葉からも、彼の冷徹な一面がわかります。しかし、彼のような現実主義的な考え方があったからこそ、魏は大きく発展したのだと思います。

『三国志演義』は単なる戦争小説ではなく、人間の知恵、忠義、野心、感情のぶつかり合いを描いた深い作品です。登場人物たちの生き方から、現代の私たちも多くのことを学ぶことができます。どんな時代にも通じる教訓と感動を与えてくれる名作だと思います。



故郷の中国山東省青島市の海です

私自身、『三国志演義』を通して、人の強さと弱さ、理想と現実の間で揺れる人間の姿に触れ、自分の人生にも役立つ多くの考えを得ることができました。今後も何度も読み返し、そのたびに新たな発見をしていきたいと思っています。

心に残る一冊 ——古今をつなぐ人間の魂の架け橋

書籍名：Art History

著作者：Marilyn Stokstad/Michael Cothren 著、王春辰ほか

現代中国学部 4 年
鄧 卓

学生時代に『芸術史』と出会い、人間の心が生み出す美術こそ、文明に宿る最も温かな永遠だと、心の底から思うようになった。この一冊は、単に芸術の歴史を教えてくれるだけでなく、時空を超えて人々の心をつなぐ人文の尊さを、優しく教えてくれた。

この本を手にとると、まず目に留まるのが二枚の印象的な画像だ。一つは鮮やかな色彩で彩られた表紙の芸術作品で、古今東西の芸術が持つ豊かな生命力が溢れ、読む者の好奇心を強く引き寄せる。もう一つは扉頁に描かれた古エジプト風の壁画で、古代エジプトの建築様式と人物の姿が細やかに再現され、千年の時を超えた文明の息吹をそのままに伝えてくる。本を開く瞬間から、これらの画像が私を遙かな歴史の世界へと誘い、遠い時代に生きた人々との心の対話を静かに始めさせてくれる。

この本を読み進めるうちに、美術が単なる創作物ではなく、人類の思いや文化、生きた証を刻み込む、永遠に消えない心の媒体だと悟った。世界各地の古代の彫刻、絵画、工芸品の一つ一つには、その時代を生きた人々の信仰、喜び、願い、切なる思いが凝縮されている。文明の姿は時代と共に変わろうとも、人々が美しさを求め、後世に大切な思いを伝えようとする人文の精神は、色あせることなく脈々と受け継がれている。

最近、SNS で大きな話題となった「教科書訪問リレー」を見て、この本への想いがさらに強く深くなった。多くの人が学生時代に使った教科書を手に、歴史的な名所や芸術の現地を訪れ、本の内容と目の前の景色を重ね合わせ、時



書籍の包装、筆者撮影



大英博物館で筆者撮影

大英博物館所蔵のエジプトの彩色木製人形棺（ミイラ用棺）は、新王国後期から第三中間期にかけての典型的な文物である。

空を超えた文化継承のリレーを繋いでいる。私にとって、この『芸術史』もまた、そんな温かなリレーの一冊だ。本の中の図版や文章を通じて、遠い時代の芸術家や無名の職人たちの思いをしっかりと受け継ぎ、現代の自分と古人の心を繋ぐ、かけがえのない架け橋になっている。

本で培った思いを胸に博物館を訪れると、ガラスケースの向こうに佇む美術品が、ただの古い物ではなく、数千年の時を超えて魂を通わせる存在に感じられる。河北省博物院の「公乘得守丘刻石」、兵馬俑に残る職人の指紋……名前も残らない人々が込めた真摯な思いは、現代の私たちに「私はここに生きていた」と静かに語りかけ、人文の温もりが時空を超えて心に響き渡る。

美術の真の価値は巧みな技巧にあるのではなく、人類の心を紡ぎ、時代を超えてつなぐ力にある。学生時代にこの一冊に出会えたことは、私の一生の財産だ。ここから学んだ人文の重みと温もりは、これからの人生でずっと心に残り、遠く離れた人々とも、過去と現在とも、心の絆で繋がっていることを信じさせてくれるだろう。

『ジェーン・エア』が私に 教えてくれたこと

書籍名：ジェーン・エア

著作名：シャーロット・ブロンテ

経済学部

ローレン・ランズベリー

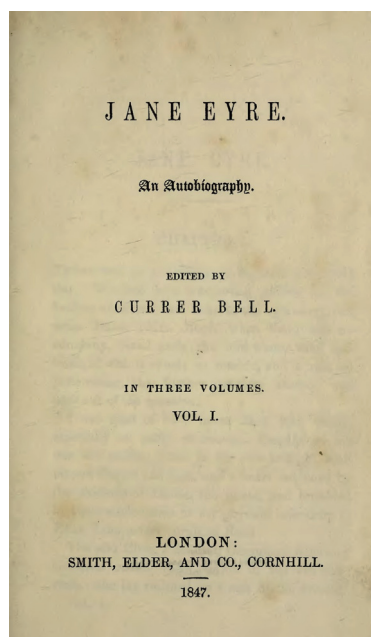
「私たちの人生を決めるのは、運命のいたずらなのだ。人生は、私たちを導く道において公平ではない。親を失おうと、一文無しになろうと、私たちは自らの運命という重荷を背負われるのだ」——『ジェーン・エア』

高校の図書館で『ジェーン・エア』を手にとった日のことを、今でも覚えています。『ジェーン・エア』は、学校の必読書でもなければ、先生や友人から勧められたものでもありませんでした。それでも手にとったのは、裏表紙に、孤児として育ち、家族も、自分の家と呼べる場所も持たずに成長した若い女性の姿が描かれていたからです。また、私たちの大半が当たり前だと思っているものを持たなかった女性の、その物語は、私が敬愛する母のことを思い起こさせるものでした。

『ジェーン・エア』の主人公のように、私の母もまた孤児でした。彼女は、第二次世界大戦の終盤の1945年に生まれた戦争孤児で、孤児院で育ち、両親や親戚のことも、自分のルーツも全く知りませんでした。彼女は何もないところから不屈の精神と強さ、そして尊厳を持って、自分の人生を築き上げたのです。十代の頃、私は母を尊敬してはいたものの、彼女が生涯を通じて戦ってきたであろう苦難をすべて理解できていたわけではありませんでした。彼女がいかに強く、そうした苦難を生き抜いてきたのか、それをひしひしと感ずることができたのは私が大人になってからのことです。しかし、その時の私は、ジェーンの人生に、母の人生を重ね合わせ、彼女の生き方に共感を覚えたのです。

『ジェーン・エア』は女性が執筆し、男性の名前で1847年に出版された英国の古典です。女性が主婦、メイド、家庭教師以外の職業に就くことさえ許されていない時代でした。そんな時代に書かれた小説の主人公、ジェーンは、富も社会的地位も、彼女を守り導いてくれる家族も何もない状態から人生をスタートさせます。そして、数多くの試練に直面しながらも強い意志、正義感、揺るぎない信仰心、そしてフェミニスト的な価値観を持って人生を歩んでいきます。ジェーンの思想は、社会の伝統的な家父長制の束縛や、その当時の女性が持っていた限定的な役割に異議を唱えるものでした。

ネタバレになるので詳細は控えますが、彼女が直面した数々の試練のほとんどは、彼女のせいで起こったことではなく、周囲の人々が彼女に課したものでした。こうした試練に加え、彼女は内なる葛藤にも苦しみます。『ジェーン・エア』は苦難の物語ですが、彼女がそれらにいかに向き合い、耐え抜いていくかが、物語の醍醐味です。



1847年の初版『ジェーン・エア』のタイトルページ
「カラー・ベル」という筆名で出版された

出典：Wikimedia commons

物語の中心を担うのは、ジェーンの信仰です。私も信心深い人間の一人ですが、かつて我が家に滞在していた日本人交換留学生に、私の信仰は私を弱くすると指摘されたことがあります。ですが、ジェーンの信仰は彼女を弱くするものではありません。むしろ、不正に立ち向かい、困難な決断を下すための強さを彼女に与えていました。その当時、まだ信仰を見出したばかりの若者だった私は、この物語を読んで、信仰は内なる強さの源であると再確認することができたのです。

また、私はジェーンがヴィクトリア朝時代に直面した、抑圧的な性別役割に対するフェミニスト的な姿勢に感銘を受けました。女性の地位が男性に依存していた時代において、この小説は女性が自立し自尊心を持って人生を生きる権利を強調し、家父長制的な価値観を拒絶しています。ジェーンは他者に依存せず、自分の生き方を貫きます。周囲に同調圧力をかけられても、彼女は自らの価値観に基づいて選択を行い、決して自分の信念を曲げません。ジェーンは、不平等な時代における平等の象徴だったと言えるでしょう。彼女は、私が憧れ、目指すべ

き女性像を示してくれました。

作者のシャーロット・ブロンテはわずか38年で生涯を終えましたが、その影響力は、それから200年近く経った今もなお続いています。彼女の表現力豊かな文章と言葉の選び方は、読者を引き込みます。主人公のジェーンは私にとってのインスピレーションです。彼女の生き方は真の強さとは往々にして静かな忍耐力である、ということを私に教えてくれました。また、彼女の物語は、自分の価値観や自尊心、誠実さを妥協してはならないと読者に説いています。私たちが常に揺るぎない信念を持ち、自分自身に誠実であり続けるべきだ、ということも私たちに教えてくれます。

私は高校と大学時代を通じて、『ジェーン・エア』を4回読みました。もしあなたも読書好きで、英文学に興味があるなら、『ジェーン・エア』を読むことをお勧めします。特に女性の方にはおすすめです。

I would like to express my sincere gratitude to Professor Miyuki Jimura of the Faculty of Business Administration for her advice in writing this Lingua article.



ジョージ・リッチモンドによる
シャーロット・ブロンテの肖像、1850年
出典：Wikimedia commons



ホーワースの教会と牧師館
(彼女の家と、父親が牧師を務めていた英国教会)
Elizabeth C. Gaskell, The Life of Charlotte
Brontë, vol. 2 (Smith, Elder & Co., 1857年).
出典：Wikimedia commons

見えない距離を生きる ——『ぼくのともしち』が映す 人間関係

書籍名：ぼくのともしち

著作名：エマニュエル・ボーヴ

経営学部3年
武市 梨愛

フランスの作家エマニュエル・ボーヴによる『ぼくのともしち』は、静かでありながら心に深く残る作品である。派手な展開や劇的な事件はほとんどないが、その分、人と人との関係の難しさや孤独が丁寧に描かれている。



白水社『ぼくのともしち』 エマニュエル・ボーヴ
出典：<https://www.hakusuisha.co.jp/book/b286299.html>

物語の主人公は、他者との関係をうまく築くことができず、どこか孤立している青年である。彼は「ともしち」を求めながらも、その距離の取り方が分からず、結果的にすれ違いや誤解を生んでしまう。その姿は決して特別なものではなく、むしろ誰もが一度は感じたことのある「人との距離感の難しさ」を象徴している。私自身も、新しい環境で友人を作ろうとしたとき、何を話せばよいのか分からず、相手との距

離をうまく縮められなかったことがある。話しかけたいのに勇気が出ず、結局ひとりであることを選んでしまった経験が主人公の姿と重なった。

この作品の魅力は、登場人物の感情が過剰に説明されていない点にある。淡々とした文章の中にこそ、主人公の不安や寂しさがにじみ出ており、読者はそれを自分自身の経験と重ねながら読み進めることになる。だからこそ、読み終えた後に残る余韻は大きく、自分の人間関係について考えさせられるのである。

学生時代は、多くの人と出会い、関係を築いていく大切な時期である。しかし同時に、他者とのかわりに悩みや不安を抱きやすい時期でもある。『ぼくのともしち』は、そうした不器用な人間関係を否定するのではなく「それでも人は誰かとつながろうとする存在である」という事実を静かに示してくれる。特に進学やクラス替えの直後は、周囲に合わせようと焦ったり、自分だけがうまくなじめていないように感じたりすることがある。私もそのような不安を抱えたことがあったため、この作品に描かれる孤独や戸惑いを他人事とは思えなかった。

この本は、友人関係に悩んだ時や、自分の気持ちが分からなくなったときにこそ手に取ってほしい一冊である。派手さはないが、読む人の心にそっと寄り添い、長く記憶に残る作品である。



舞台となった Montrouge (モンルージュ)

出典：<https://www.expedia.co.jp/Montrouge.dx4515>

フランスの小説を読んで みませんか

経営学部
下村 武

みなさんはフランスの小説は読んだことがありますか。私は、普段名古屋キャンパスでフランス語を教え秋学期には毎年文学の講義を担当しているので、もしかしたら文学の講義を履修した学生の何人かは講義内で紹介した本を手にとって読んでくれたかもしれません。今回紹介するのは豊橋キャンパスの文学部の講義のなかで、学生とフランス語で読んだ小説の紹介です。

まず一冊目は、2022年にノーベル文学賞を受賞したアニー・エルノーの自伝的小説『事件 L'événement』（2000年にフランスで刊行）です。舞台は人工妊娠中絶がまだ合法化されていない1960年代のフランスです。思いがけない妊娠をしてしまった大学生の主人公「私」は大学の学生寮で暮らしながら、周囲の無理解や偏見の目

に晒され、葛藤、苦悩する様子が淡々と語られます。同性婚が認められている現在のフランスを考えるとにわかには信じられないようですが、今から50年ほど前、1975年になって初めて当時の厚生大臣シモーヌ・ヴェイユのもとで人工妊娠中絶が認められました。それまではフランスの社会では人工妊娠中絶は犯罪とされ、この小説の中で描かれるように中絶に手を貸した医師は法律によって処罰されました。2024年には女性が人工妊娠中絶を選ぶ権利は、フランス共和国憲法に明記され、保障されることになりました。近年の、My body, my choice の運動とも重なる部分があるように思います。

フランスの大学生は今でも、平日は大学そばの学生寮やアパートで暮らし、週末になると溜め込んだ洗濯物をバッグに詰め込んで実家へと帰ります。以前の授業で読んだ、同じエルノーの『場所 La place』（1983）でも語られるルーアンの食堂兼食料品店を営む実家に帰っても主人公の「私」は、妊娠したことを母に悟られまいとするのですが、妊娠によって学業ができなくなりこのまま両親と同じ社会的な枠組みから抜け出せないままになるのか、葛藤します。

わたしは、自分の生まれ落ちた社会階級と、この身に起こったことの関係をばんやりと見定めていた。労働者と小商店主という一族のなかで初めて高等教育を受けたわたしは、工場とレジからは逃げ出せていた。しかし、大学入学資格試験にしり、文学士号にしり、妊娠した貧乏人の娘が、それによって貧しさを受け継ぐ運命を免れたためしはいまだないのだ。アルコール中毒や紋章と同じこと。わたしはふたたびお尻をつかまれてしまっていたし、わたしの中で成長しているものは、ある意味で、社会的挫折だと言えた。

（菊池よしみ訳、ハヤカワ epi 文庫）



アニー・エルノー 『嫉妬／事件』

法律的にも人工妊娠中絶の許されなかった時代に、主人公の「私」はどのような決断をするのでしょうか。2021年には「あのこと」のタイトルで映画化もされています。結末はぜひ自分で確かめてみてください。

もう一冊も、今年度の豊橋キャンパスの授業でテキストに選んだ小説です。みなさんはジョルジュ・ベレックという名前を聞いたことがありますか。ベレックは日本ではほとんど知られていないと思いますが、アルファベットのEを一度も使わずに書いた長編小説『煙滅』の作者としてフランスでは特に知られています。もう一冊に選んだのはベレックの『Wあるいは子供の頃の思い出』です。タイトルからわかるように、こちらもベレックの自伝的小説です。

ぼくは子供の頃の思い出がない。十二歳の頃までのぼくの物語は数行に収まってしまふ。すなわちぼくは父を四歳で、母を六歳で亡くした。 (酒詰治男訳、水声社)

ベレック自身ユダヤ系の家庭に生まれ、父を戦争で亡くし母はアウシュビッツの強制収容所へ移送される途中に行方不明になり、テキストのそこかしこに家族のユダヤ人大量虐殺（ホロコースト）の記憶が入り込んでいます。フランス語の原文では、イタリックで書かれた章と地の文で書かれた章が交互に現れ、一見すると共通点のないこれらの章が次第に交錯していきます。ホロコーストの記憶は、ベレックに限らず第二次世界大戦後の二十世紀フランス文学の重要なテーマのひとつであり、今日においても必要なテーマのひとつであり続けています。奇しくも2026年はアメリカ／イスラエルとイランとの対立が表面化し、ホルムズ海峡が封鎖されるなど日本に住むわたしたちにも大きな影響が出る事態となりました。こうした事態は、かつて起きたヨーロッパのホロコーストともはや無関



ジョルジュ・ベレック『Wあるいは子供の頃の思い出』

係な出来事とは言えないでしょう。後半のある章の中で、ベレック自身と思われる「ぼく」は次のように語っています。

その後、ぼくは叔母と一緒に強制収容所の展示会を見に行った。それはラ・モット＝ピケ＝グルネルの近くで催されていた（この同じ日にぼくは地下ではなく中空に地下鉄が存在するのを発見した）。ガスにやられた者たちの爪が引っ搔いた窯の壁を見せる写真、そしてパンの玉で作られたチェスのセットというのを憶えている。

次の章では、もうひとつの物語である架空のWという島の物語、そこでは主人たちの世界と奴隷たちの世界があることが語られます。今日イスラエルに空爆されるガザやレバノンの人々、かつて強制収容所へ連行されたユダヤ人たち、虐殺されるのは壁の中の人々だけでなく世界は一種の牢獄や強制収容所なのではないか、そんな風にベレックの小説はわたしたちに問いかけます。

自分を肯定する、ということ

書籍名：ナナメの夕暮れ 著作名：若林正恭

国際コミュニケーション学部4年
小林 遥香

私が学生時代に読んで最も印象に残った本は何かと考えたとき、真っ先に思い浮かぶのが『ナナメの夕暮れ』だ。私は価値観が揺れ動きやすい学生のうちにこそ、エッセイを読んでみてほしいと思っている。そこにはその人ならではの剥き出しの心情や物事の捉え方が率直に綴られている。こうした他者の内面に触れる経験は、自分自身の考え方を見つめ直す良いきっかけになるはずだ。

本書はかつて世の中をナナメに見てきた著者が、四十を目前にしてどのように世界を肯定できるようになったのかを綴った一冊である。その中から今回は「ナナメの殺し方」という話を紹介したい。

この話はスターバックスで注文をする時に「グランデで」と言えない、という著者の悩みから始まる。これまで自分が「スタバでグランデとか言って気取っちゃって」と他人を馬鹿に



お気に入りのエッセイたちです

してきたからこそ、自分がその立場になった時に他人から同じような視線を向けられるのが怖くなってしまおうというのだ。こうした自意識に対し、著者はこう述べている。

「価値下げによる自己肯定は楽だから癖になる」「他人への否定的な視線は、時間差で必ず自分に返ってきて、人生の楽しみを奪う」

この言葉は私の心に深く突き刺さった。あまりにも鋭く、今でも時折まるで呪いのように自分自身に囁いてくるほどだ。なぜなら私自身も著者と同じ思考をしてきたからだ。自由な時間が増えた大学生活、SNSで他人の生活を簡単に覗けるようになった今、自分と他人を比較せずにいるのは難しい。羨ましいと思う心に蓋をして、物事をナナメから見ることでしか自己防衛の術がなかったのだ。その結果、私は著者の言う「生きていて全然楽しくない地獄」にハマってしまった。

「ナナメの殺し方」の続きにはそんな地獄から抜け出すためのヒントが示されている。生き辛さの原因である他人からの否定的な視線を殺すには、まず自分が他人への否定的な視線をやめて、自分の「好き」を見つけて肯定する。そうすることで世界の見え方が変わるというのだ。もし世界をナナメに見てしまう瞬間があるのなら、ぜひ本書を読んでみてほしい。あなたに世界を肯定する勇気を与えてくれるはずだ。



若林正恭『ナナメの夕暮れ』表紙

偶然か、必然か

書籍名：深夜特急 著作名：沢木耕太郎

法科大学院
松井 直之

「ある朝、目を覚ました時、これはもうぐずぐずしてはいられない、と思ってしまったのだ」。

これは、ある日インドのデリーからイギリスのロンドンまで乗合いバスを乗り継いで行くことを思いつき、26歳から27歳にかけて、約1年間、ユーラシア大陸を旅行した沢木耕太郎による紀行小説『深夜特急』の冒頭の文章です。この壮大な旅の道のりは、香港―マカオ―マレー半島―シンガポールが「第一便」として、続けてインド―ネパール―パキスタン―アフガニスタン―イランが「第二便」として、最後にトルコ―ギリシャ―地中海―南ヨーロッパ―ロンドンが「第三便」として描かれています（現在、文庫本として6冊に分冊化されて出版されています）。



『深夜特急』第1便～第3便 撮影：松井直之

主人公の「私」は、「できるだけ安い航空券を手に入れ、東京からデリーまで直行するつもりだった」が、「途中二カ所だけなら立ち寄ることができる仕組み」の航空券なのに「どこにも寄らずデリーに直行してしまうのが急にもったいなく思えてきた」。そこで、「《東京―デ

リー》のチケットを《東京―香港―バンコク―デリー》のチケットに作り換えてもらうことにした。「香港などはせいぜい二、三日あれば充分の、単なる通過地点と見なしていた」が、「香港で、一週間、また一週間という具合に滞在が延びていった」。

旅は、偶然に左右されることがあります。そして偶然に左右されることは、普段の生活のなかにもあります。

私の場合、大学1年生の時の第一外国語の選択が、これにあてはまります。私は、英語よりも、丸や棒などから形作られるハングルに興味がありました。ところが、第一外国語として朝鮮語・韓国語が設定されていなかったのも、中国語を選択することにしました。当時、NHK教育テレビ・中国語講座の講師だった榎本英雄先生が中国語の授業を担当していたのです。テレビに出ている人に会ってみたかったのです。

数年後、背の高さが印象的な池田夢（孟広学）先生に夏休みの語学研修を軽く勧められ、北京の中央戯劇学院に行くことにしました。北京での約1か月の生活は、初めてのことで、中国語で話す力・聞く力がないことを実感する毎日でした。その悔しさもあり、帰国後、週3日、夕方から日中学院（東京・飯田橋）に通うことにしました。

日中学院では、平松正子先生による中央人民广播电台（ラジオ局）のニュースを聞いて書き取る授業が記憶に残っています。最初の頃は、高校生・大学生・社会人・退職者の同学（クラスメイト）たちと「速くて聞き取れない、聞き取れても当てはまる漢字が出てこない」などと言いつつ聞いていたのが、次第に、耳が慣れてきて聞き取ることができるようになり、当てはまる漢字が出てきて書き取れるようになっていきました。

このように学んできた中国語を活かして外交官になろうと思っていたのですが、外交官試験

に合格しなかったので、大学院に進学することになりました。日本では、中国や台湾の憲法を研究する研究者があまりいないことから、大学院では、中国や台湾の憲法の研究を始めました。大学院生の時には、研究や観光で、中国・台湾・香港・シンガポール・マレーシアに行き、できるだけ中国語を使ってみるようにしました（松井直之「現地集合・現地解散——シンガポールからマレーシアへの旅」Lingua19号、2022年、pp. 8-9 : <https://taweb.aichi-u.ac.jp/tgoken/lingua/pdfs/Lingua19.pdf> 参照）。



松井直之「現地集合・現地解散——シンガポールからマレーシアへの旅」Lingua19号、2022年、pp. 8-9

このような紆余曲折を経た現在、私は、愛知大学で中国や台湾の憲法について研究し、法科大学院で法科大学院生に憲法を教えています。

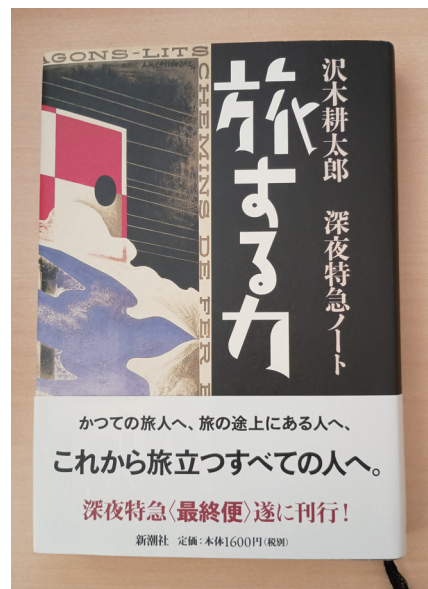
沢木耕太郎は、2008年11月に「最終便」として刊行された『旅する力——深夜特急ノート』で、次のように述べています。

「実際、旅は偶然に満ちている。さまざまな種類の偶然が旅を変容させていこうとする。たとえば、いくら厳密な予定を組んでいたとしても、予期しなかった事態に遭遇して変化を余儀なくされそうになる。まるで砂の城を洗う波のように、偶然が幾重にも押し寄せ予定を崩していこうとする。そのとき、大事なのは、あくまでも予定を守り抜くことと、変化の中に活路を

見出すことのどちらがいいか、とっさに判断できる能力を身につけていることだ。それは言葉を換えれば、偶然に対して柔軟に対処できる力を身につけているかどうかということでもある」。

「偶然に対して柔軟に対処できる力」は、「経験や知識を含めたその人の力量が増すことによって変化していくものだろうが、それはまた、思いもよらないことが起きるという局面に自分を晒さなければ増えてこないものでもある。だからこそ、若いうちから意識的に、思いもよらないことが起きうる可能性のある場というものに自分を晒すことが重要になってくるような気がするのだ」。

学生の皆さんには、日本国内はもとより、海外にも積極的に出ていき、多くの経験をして、それぞれ社会に羽ばたいていって欲しいと思います。そのためにも、まずは『深夜特急』を読んでみてください。



『旅する力』撮影：松井直之

AICHI UNIVERSITY
厚生棟

4階

名古屋語学教育研究室

2025年度 第31回 外国語コンテスト結果報告

今年も日頃の学習成果を発揮しようと約180名の学生たちが参加、すべての部門(8言語10部門)でコンテストが開催されました。各部門とも非常に高いレベルの発表に、審査員は順位をつけることに大変苦労されたとのことでした。

12月18日木曜日に行われた表彰式では、各部門優勝者の発表に聞き入ったり、パフォーマンスでは大いに盛り上がりたりと、交流を深めておりました。

参加いただきました皆様、ありがとうございました。



部門	順位	氏名	学部	学年	部門	順位	氏名	学部	学年
英語部門	1位	市川 遙代	国際コミュニケーション学部	4年	ロシア語部門	1位	成瀬 純晃	法学部	1年
	2位	嶋崎 真琳	国際コミュニケーション学部	2年		2位	西岡 実優	法学部	2年
	3位	片岡 泉	国際コミュニケーション学部	1年		チーム参加 3位	折戸 歌鈴	国際コミュニケーション学部	2年
ドイツ語部門	1位	山本 徹弥	国際コミュニケーション学部	2年	韓国・朝鮮語部門	1位	久後 楓	法学部	2年
	2位	岡村 萌映	国際コミュニケーション学部	2年		2位	坂本 芽衣梨	経営学部	2年
	3位	ワケル タティアナ	国際コミュニケーション学部	1年		2位	萩久保 さちえ	経営学部	4年
フランス語部門	1位	太田 帆夏	国際コミュニケーション学部	2年	タイ語部門	3位	焼山 朋佳	国際コミュニケーション学部	4年
	2位	川口 朋花	国際コミュニケーション学部	3年		1位	近藤 菜月	国際コミュニケーション学部	3年
	3位	仙石 達夏	国際コミュニケーション学部	3年		2位	薄山 芽久	経営学部	1年
中国語 法・経済・経営・ 国際コミュニケーション学部	1位	中村 未衣	国際コミュニケーション学部	4年	日本語部門	3位	山口 あいり	経営学部	1年
	2位	中西 晃輝	国際コミュニケーション学部	3年		1位	MOON YUBIN	国際コミュニケーション学部	4年
	1位	白浜 清月	経済学部	1年		2位	KIM DAIN	国際コミュニケーション学部	1年
中国語 現代中国学部 1年生部門	1位	辻尾 陽香	現代中国学部	1年	中国語 現代中国学部 2年生以上部門	3位	HO, PEI-YI	協定留学生	
	2位	服部 澄乃	現代中国学部	1年		2位	片桐 万美子	現代中国学部	3年
	3位	大賀 将弥	現代中国学部	1年					

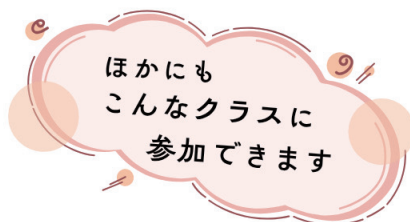
congratulations!



名古屋語学教育研究室開室時間：月～金 9:00～17:00 閉室日：大学カレンダーに準ずる(急な閉室あり)



豊橋語学教育研究室



enjoy!



2026年度 外国語検定試験奨励金制度のご案内

名古屋校舎			豊橋校舎	
言語	試験名称	基準	試験名称	基準
英語	実用英語技能検定（英検）	準1級以上	実用英語技能検定（英検）	2級以上
	TOEIC Listening & Reading Test*	650点以上	TOEIC Listening & Reading Test*	530点以上
	TOEIC Speaking & Writing Tests*	130点以上	TOEIC IP	①750点以上 ②前年比100点以上
	TOEFL iBT	3 以上	TOEFL iBT	3 以上
	IELTS	4 以上		
	ビジネス通訳検定（TOBIS）	3 級以上		
	日商ビジネス英語検定	3 級以上		
	通訳案内士（通訳ガイド）	合格		
ドイツ語	ドイツ語技能検定（独検）	4 級以上	ドイツ語技能検定（独検）	4 級以上
フランス語	実用フランス語技能検定（仏検）	4 級以上	実用フランス語技能検定（仏検）	4 級以上
	DELFS・DALF	A1以上	DELFS・DALF	A1以上
	TCF	100点以上	TCF	100点以上
◎中国語	中国語検定	4 級以上	中国語検定	4 級以上
	HSK	3 級以上	HSK	3 級以上
ロシア語	ロシア語能力検定	4 級以上	ロシア語能力検定	4 級以上
韓国・朝鮮語	ハングル能力検定	4 級以上	ハングル能力検定	4 級以上
	韓国語能力（TOPIK）	2 級以上	韓国語能力（TOPIK）	2 級以上
タイ語	実用タイ語検定	4 級以上		
日本語	日本語能力（JLPT）	N1級	日本語能力（JLPT）	N1級
	BJT ビジネス日本語能力テスト	460点以上	BJT ビジネス日本語能力テスト	460点以上

*名古屋校舎のTOEICは公開テストのみとなります。 ◎中国語は現代中国学部を除きます。

受付期間 名古屋校舎 ①2027年3月卒業予定者：11月4日（水）まで
ただし、11月4日（水）までに申請できなかった者は、1月29日（金）まで申請受付を可とする。

②①以外の者：1月29日（金）まで

豊橋校舎 2026年12月1日（火）～2027年2月18日（木）

詳細は所属校舎の語学教育研究室にて確認してください。

奨励対象者 学部学生・短大生（協定留学生・大学院生・科目等履修生は除きます）

〈編集後記〉

韓国の正東津（チョンドンジン）や中国の青島（チンタオ）の海の青さに驚きました。今回のLingua 27号では、前号に続きまして「心に残る一冊——学生時代に読みたい本」を特集いたしました。ヨーロッパ・アメリカ、アジア各地の本を1冊取り上げ、執筆者のさまざまな思いや体験を語っていただきました。また新鮮な情報も多く、「たかが一冊、されど一冊」という思いを新たにいたしました。ご執筆いただきました先生方や多くの学生のみな様に心より感謝申し上げます。

Lingua 27号編集委員会（藤森猛、下村武、朴瑞庚、樋口恵）